

令和4年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2-1 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

2-2 「大阪市版チャレンジテストplus」の調査の目的

- (1) 生徒及び保護者が、学習理解度及び学習状況等を知り、目標をもって主体的に学習に取り組めるようにする。
- (2) 学校が生徒一人ひとりの学力を的確に把握し、学習指導の改善及び進路指導に活用する。
- (3) 学びの連続性を確立する観点から、客観的・経年的なデータを把握、分析し、効果的な指導方法や課題を「見える化」し、その改善に役立てる。

3 「大阪市英語力調査（GTEC）」の調査の目的

- (1) グローバル社会において活躍し貢献できる人材の育成をめざし、生徒の英語力の充実・向上を図るため、本市教育振興基本計画に基づき、生徒に求められる英語力や学習の習熟過程等を把握・検証する。
- (2) 生徒が自らの英語力を的確に把握するとともに、生徒の英語力の実態を分析することにより、各学校における学習指導の充実や改善、工夫に役立てる。

4 「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の調査の目的

- (1) 子供の体力・運動能力等の状況に鑑み、国が全国的な子供の体力・運動能力の状況を把握・分析することにより、子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会、各国公立私立学校が全国的な状況との関係において自らの子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、子供の体力・運動能力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各国公立私立学校が各児童生徒の体力・運動能力や運動習慣、生活習慣、食習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

令和4年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

1 全国学力・学習状況調査

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均正答率(%)			平均無解答率(%)		
			国語	数学	理科	国語	数学	理科
3年	学校	98	61	42	43	5.9	13.0	4.2
	大阪市	—	66	50	46	5.5	12.2	4.4
22.4.19	全国	—	69.0	51.4	49.3	4.3	10.8	3.4

2 中学生チャレンジテスト

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均点(点)					平均無解答率(%)				
			国語	社会※	数学	理科※	英語	国語	社会※	数学	理科※	英語
3年	学校	93	48.3	52.7	50.5	56.2	49.2	12.3	4.0	9.4	4.3	6.4
	大阪市	—	53.4	54.7	54.9	55.8	53.7	11.9	4.3	9.4	5.3	6.8
9月6日	大阪府	—	53.8	55.4	56.0	55.9	54.2	12.1	4.6	9.6	5.8	7.1
2年	学校	94	54.5	43.5	43.4	47.2	49.7	8.6	5.9	20.0	11.8	8.6
	大阪市	—										
	大阪府	—	59.6	43.3	49.0	52.9	56.1	8.5	7.7	16.1	9.3	6.5
1年	学校	90	51.6	43.5	43.3	45.1	50.0	15.0	5.1	9.9	6.6	6.7
	大阪市	—		51.8		56.2			4.9		5.8	
	大阪府	—	58.6	—	55.0	—	59.1	12.5	—	8.0	—	5.3

- ※ 1年生の社会・理科については、「大阪市版チャレンジテストplus」として実施
- ※ 1年生の理科は化学的領域を選択
- ※ 2年生の社会はB問題を選択 2年生の理科はA問題を選択
- ※ 3年生の理科はC問題を選択

3 大阪市英語力調査 (GTEC)

学年 実施月日		生徒数 (人)	読むこと 【リーディング】	聞くこと 【リスニング】	書くこと 【ライティング】	話すこと 【スピーキング】
			(スコア)	(スコア)	(スコア)	(スコア)
3年	学校	104	96.2	96.0	144.2	94.7
10月18日	大阪市	—	102.8	105.4	152.4	96.9

4 全国体力・運動能力、運動習慣等調査

学年	生徒数 (人)	握力	上体 起こし	長座 体前屈	反復 横とび	20m シャトル ラン	持久走 男子1500m 女子1000m	50m走	立ち 幅とび	ハンドボール 投げ	体力 合計点
	(人)	(kg)	(数)	(cm)	(点)	(回)	(秒)	(秒)	(cm)	(m)	(点)
2年男子	学校	94	32.48	28.02	46.27	55.00	91.45	7.68	198.82	22.73	47.31
	大阪市	—	28.88	26.10	42.66	51.66	77.74	8.08	196.13	19.98	40.80
	全国	—	28.99	25.74	43.87	51.05	78.07	8.06	196.89	20.28	41.04
2年女子	学校	—	26.79	21.97	46.28	47.90	58.21	8.59	169.03	12.61	51.81
	大阪市	—	23.08	21.91	45.40	46.34	51.72	9.07	166.28	12.26	47.00
	全国	—	23.21	21.67	46.07	45.81	51.60	8.96	167.04	12.45	47.42

令和4年度 東生野中学校のあゆみ

—結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

中学生チャレンジテスト(2年生)【成果と課題】

【国語】

「知識及び技能」、「思考力判断力表現力」、どちらの観点においても課題がうかがえる。得点の分布では、平均点付近の生徒が一番多かったが、目立って高得点の生徒がやや少なく、平均から10点ほど低い点数帯の生徒が多かった。現代文、古文とも大阪府平均よりやや下回る得点だった。しかし、「資料の活用」における「記述問題」では、府平均を上回る点数だった。

【社会】

全体としては大阪府平均をわずかに上回ったが、地理的分野の正答率が低かった。正答率が低い地理的分野の問題の多くは、九州地方、中国・四国地方の範囲で、インフルエンザの流行・学年閉鎖・リモート授業の時期に学習していた内容であったことが原因と考えられる。また、複数の資料を読み取って考える問題や、理由を説明する記述式の問題の正答率も低かった。根気強く文を読んで資料を読み取ったり、考えを言葉にする力がまだまだ不足していると考えられる。

選択式の問題だけでなく、短答式の問題(二毛作、国土地理院など)も府平均を上回っていたので、知識が少しずつ定着していると考えられる。また、資料読み取り問題については、授業で取り上げたことのある資料(発電所の分布図や資源の輸入先の資料など)は、正しく読み取れており、正答率が府平均を上回っていた。また歴史分野は、学習した内容を比較的きちんと理解していることがうかがえ、難易度が高くても府平均を15～20ポイントほど上回る正答率の問題もあった。

【数学】

大阪府との比較で、「数と式」は2.5ポイント、「図形」は1.9ポイント、「関数」は1.1ポイントとそれぞれマイナスの結果となった。本年は目標として、関数の分野で府の平均をこえることをあげていた。そこで33点の配点中1.1ポイントの差は、重点的に指導してきた成果だといえる。しかし、目標を達成できてはおらず、課題は残る。関数領域の第4問についてみれば、基本的な知識を問われる問題には正答率が府の平均を上回るが、基本的な知識を利用して問題解決にあたる問いに関しては下回る。そのほかの設問は、いずれも正答率は府の平均を下回る傾向にある。第7問に関しては、すべての問いで5～10ポイント下回っている。また、中央値が39.5であることと、分布表が「5—9点の階級から45—49点の階級」と「55—59点の階級から85—89点の階級」で2つの山ができていることを考えると生徒が低得点層と高得点層に2分化されていることがわかる。割合を計算すると低得点層63%、高得点層37%となっている。

【理科】

今年度の結果としては、「大阪府平均:52.9点・本校47.2点」という結果であり、大阪府の平均点から5.7点下回った結果となった。

今回の設問では、「エネルギー領域」で大阪府の平均を0.1点上回った。例年エネルギーの分野で電流について理解を深めることは、他の分野と比べて困難な傾向にあったが、今年度の生徒にとっては、イメージを持ちやすい内容であることがうかがえる。

反対に「物質領域」では、大阪府と比較して、本校の無回答率が高かった。このことから、今回出題された【酸化銀の熱分解・加熱による銅の酸化】について、深く理解ができていない生徒が多いこと。何を答えてよいか、覚えるべき用語が定着していないことが読みとれる。さらに、得点分布グラフを見ると、20～24点の層と70～74点の層が多い。20点台の層を引き上げることができれば、学年としての平均点が向上することが見込まれる。

【外界からの刺激を受けるとる感覚器官】や【サツマイモの葉でつくられるデンプン】などについての設問では、大阪府の平均正答率を上回っていた。自分の目で見てわかる現象については、印象に残りやすく、活用しやすいことがわかる。他の事象についても、生活に根ざした例を用いて印象づけられるよう工夫を行っていく。

【英語】

- ・全体の平均点は49.7で、大阪府平均(56.1)より6.4下回った。
- ・領域別にみると、「聞くこと」-1.8、「読むこと」-1.4、「書くこと」-3.3 となっており、「書くこと」において最も平均が低い。
- ・「書くこと」及び「記述式」で答える問題で、正答率が府平均より特に低く、また無回答率が高くなっている。
- ・昨年度に比べ、「読むこと」の領域では-2.4から-1.4と若干向上した。

令和4年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

中学生チャレンジテスト(2年生)【今後に向けて】

学力向上をしていくために、すべての教科の基礎である「読解力」を向上させていく方法がある。本校では、2022年度4月から、朝学活時に読売新聞社発行の「よむYOMUワークシート」を活用し、「読解力」向上を目指している。来年度も実施し、学力向上につなげていきたい。

【国語】

国語の授業の中で、元来苦手傾向のあった「記述」に対する苦手意識を減らし、「書くこと」に「慣れる」ことを目標にこの1年間学習に取り組んできた。全体の点数は、府平均へ5ポイントほど届かなかったが、「記述問題」では府平均を上回り、また無回答率も府平均よりも下回る結果であった。全体的な国語力を一気にあげるには時間がかかるが、何か一つだけでも伸ばす、という視点で学習に取り組むとことのできるが増えてきており、今後も実施していく。

【社会】

毎年のことであるが、2年の出題範囲だけが非常に広く、範囲をこなすのに精一杯となってしまうので、1年のときから緩急をつけ、余裕をもった授業を心掛けたい。思考・判断・表現力を養うため、毎回の授業で発展問題に取り組んでいるが、今後は資料の読み取りや考えを言語化する課題をもっと取り入れていく。また、3年生は時間に余裕があるため、次年度は小テストを繰り返しおこない、基礎的事項の定着をはかりたい。

【数学】

授業内で、難易度の高い問題を多く扱い、知識を利用する問いに慣れていく必要がある。また、基礎知識の指導の際、どのような問われ方をしていくのかを踏まえて指導していく。関数に重点を置いて、一定の成果が見られたので、他の領域でも実施していく。また、得点層の二分化をなくしていく。習熟度別授業で低得点層に対しても、難易度を高くした指導を増やしていく。

【理科】

全体として、短答式の得点率が著しく低いことがいえる。これを改善するためには、「問題を読み解く力」と、「キーワードをもとに知識を引き出す力」を養っていく必要がある。授業の中でも、一問一答形式の発問に答えたり音読したりすることは難なく取り組むが、問題文を読んで、答えを導くためのキーワードを把握することを苦手とする生徒も少なくない。引き続き、問題を解くときの着眼点について繰り返しふれていく。

授業では、導入→説明→演習のサイクルで取り組んでおり、「目には見えないくらい小さな物質のふるまいに目をむける(想像できるようになる)」ことの喜びを感じさせるとともに、「知識をもとに、自分の考えを組み立て、表現する」ことを身につけさせられるよう、粘り強く指導していく。

【英語】

- ・単語、文法問題、英作文問題で正確に「書くこと」を積み重ね、より丁寧に個別指導をしていく。
- ・「読むこと」については、帯活動の「読みトレーニング」などの多読教材により向上が見られたおり、今後も続けていく。
- ・「読むこと」と「書くこと」、また「聞くこと」と「書くこと」を統合した活動に取り組み、テストでの無回答をなくせるように指導していく。

令和4年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

中学生チャレンジテスト(1年生)【成果と課題】

【国語】本校の生徒の平均正答率を問題形式ごとに分類した結果、選択式問題は66.0% (府平均71.1%)、短答式問題は44.1% (府平均54.7%)、記述式問題は30.4% (府平均約36.0%)となり、短答式で府平均との差が最も大きかった。また、問題形式ごとの無解答率は、選択式は1.0% (府平均1.7%)で府平均より低かったが、短答式は26.2% (府平均19.3%)、記述式は31.9% (府平均28.4%)で、どちらも府平均を上回っていた。平均点を問題形式別に見ると、選択式で30.1点 (府平均32.3点)、短答式で16.9点 (府平均20.9点)、記述式で4.6点 (府平均5.4点)であった。それぞれ府の平均点を100%とすると、選択式で94%、短答式で81%、記述式で83%という結果になった。領域別に見ると、「情報の扱い方に関する事項」および「書くこと」において、いずれの問題形式でも正答率が50%を下回っている。また、「読むこと」においては、選択式の正答率が51.7% (府平均62.5%)、短答式の正答率が55.6% (府平均73.0%)で、どちらも府の平均正答率より10%以上低い結果となっている。これらのことから、文章の内容を読み取ることや、選択肢ではなく自分で考えて答えを導くことが、本校の生徒の課題であるとわかった。

【数学】得点別分布の割合は、90点以上の分布は府より多いが、65点以上89点以下の分布が府の分布より少なくなっている。評価の観点別得点率では「知識・技能」が50%を超えていることに対して、「思考・判断・表現力」は14.9%と低い。問題形式別の得点率では、「記述式」が8.2%と他に比べて低い。

【英語】府平均を大きく下回る (府平均-9.1ポイント) 結果となった。特に「読むこと」と「書くこと」の問題で達成度が低かった (正答率:読むこと40.2%・書くこと40.1%)。しかし「聞くこと」については他項目に比べて達成度が高く、正答率が62%であった。

【社会】資料を整理して、問題を理解し、表現するという点に関しては、読解力の低さから、また、じっくり考えるという習慣のなさから、高得点を取る事が難しい。今回のテストで、大阪府平均よりさらに8ポイント低いのは、あきらかに学習した内容の忘却がそのままになっていることが要因となっている。

【理科】今年度の結果としては、「大阪市平均:51.5点・本校平均40.7点」であり、残念ながら大阪市の平均点から下回った結果となった。正答率は、「生物の領域」中の【動物の分類】で市と比べて-5.2%、「粒子の領域」中の【物質の状態変化】で-4.3%であった。この2つの範囲は、比較的生活の中で実感を得やすいものであることから、他の範囲においても同様に感じさせる工夫が必要である。年間を通して複数回にわたって取り上げた用語については、定着がみられる。

中学生チャレンジテスト(1年生・2年生)【今後に向けて】

学力向上をしていくために、すべての教科の基礎である「読解力」を向上させていく方法がある。本校では、2022年度4月から、朝学活時に読売新聞社発行の「よむYOMUワークシート」を活用し、「読解力」向上を目指している。来年度も実施し、学力向上につなげていきたい。

【国語】今回のチャレンジテストでは、漢字の書き取りや、主語と述語の対応など、国語の授業で既習の内容を問う問題でも、正答率が極端に低いものがあった (大問一3②、大問四5)。まずは毎日の授業で学んだことを定着させて、生徒の学力に繋げることが必要だと思われる。また、普段の授業で長い文章を読むことに苦手意識がある生徒は、今回のテストでも読解問題の無解答率が高い傾向が見られた。そのため、短く内容が明快な教材の読み取りを通して生徒に「文章を読める」という実感をもたせ、文章読解への苦手意識を減らし、読解問題に積極的に取り組む力を育成する。

【数学】「 $(-0.3) \div 6/7$ を計算する」設問は、全設問中で、大阪府との正答率の開きが最も大きく、差は25.7%であった (【本校】36.3%、【府】62.0%)。負の数と正の数の除法の計算ができるかを問う設問である。学習指導に当たっては、正しい計算の仕方を確認する活動やドリル学習を取り入れるなど、確実な定着を図る工夫がより一層求められる。

・「比例 $y=ax$ のグラフ上に $(5,-1)$ があるとき、 a の値を求める」設問は、全設問中で大阪府との無回答率の開きが最も大きかった。(【本校】24.2%、【府】13.2%)。比例の関係を表すグラフの特徴を用いて比例定数を求めることができるかを問う設問である。学習指導に当たっては、変数に文字を代入する方法の確認する活動や式・グラフを用いて、比例の仕組みの理解力を向上させる学習活動を有効である。

【英語】「読むこと」の達成率を向上させるため、意味のまとまりをとらえて読ませる活動や、自分の考えを書かせる機会を増やす。また「聞くこと」の長所を活かして、「聞くこと」と「書くこと」を組み合わせるなど複数の技能を統合した活動を取り入れ、それぞれの項目の達成度を向上させる。

【社会】授業内容を精選し、生徒が興味関心を持てるよう工夫し、講義中心の授業から思考・表現の機会を得るような授業を展開していく。

【理科】全体として、知識を問われる設問よりも思考力を問われる設問での得点率が低いことがいえる。「習ったことをどう活かすか」を自分で考えられるよう、導いていきたい。

習ったことを「覚えていない」「思い出すことができない」状態を減らしていくためにも、年間を通して、そして学年が上がるにつれて、既習内容について触れる機会を設定していく。

令和4年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

令和4年度「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」における成果と課題と今後の取組について

男子
体力合計点、握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、50m走、立ち幅跳び、ハンドボール投げ、全種目(持久走を除く)において全国、大阪市平均を上回る結果となった。本校の生徒は運動への興味、関心が高く、アンケート質問では「運動やスポーツは好きですか」の肯定的回答が97.8%と全国、大阪市平均を約10%上回っている。
保健体育の授業では、①「運動量の確保」②「リーダーを中心にグループ活動」③「主体的な行動」の3点に重点を置いた授業作りを行っている。生徒は何事にも全力で取り組み、仲間と協力して楽しんで活動している。そのことを表す結果が、アンケート質問の「保健体育の授業を受けることは、あなたの生活を健康で明るいものにする1つの要素になっていますか」の肯定的回答95.7%に(全国・大阪市平均を上回っている)つながっている。
今後も運動やスポーツに親しむ資質や能力の育成を継続して取り組んでいきたい。

女子
体力合計点、握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、50m走、立ち幅跳び、ハンドボール投げ、全種目(持久走を除く)において全国、大阪市平均を上回ることができた。1年生の時より準備運動の中で、毎回7種目トレーニングを行っており、その結果、平均値を上回れたと考えられる。しかし、その中でも大阪市との記録を比べる中で、上体起こしは+0.06しか上回ることができなかった。力の入れ方や、普段から回数だけではなく、時間を決め実施するなど意識させるポイントは多いと思われる。
「放課後や学校が休みの日に、部活動や地域スポーツ以外で、運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすることがありますか。」について、否定的な意見が55.2%と半数を超えており、全国平均値とは+6.3%、大阪市平均とは+1.1%上回っており、授業や部活動以外では体を動かす機会が少ないと考えられる。その中で、「保健体育の授業は楽しいですか。」については、肯定的な意見が79.3%となっており、今後は運動やスポーツに親しむ資質や能力の育成に取り組みつつ、授業内での運動量を増やしていきたい。

令和4年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

GTEC【成果と課題】

読むことは、－5.8ポイント 聞くことは－9.4ポイント 書くことは－8.2 話すことは－1.9ポイントと全技能に於いて、大阪市平均を僅かに下回る結果となった。

聞くこと、読むことに関しては、初見の英文の理解をすることに対しての苦手意識が顕著に表れた。

話すことに関しては、スピーチやプレゼンテーションなど用意した原稿を覚えて発表するなどできているが、質問に対して即興で返事する、与えられたテーマに対してその場で考え、まとまった量を話すことに対して課題がみられる。

書くことに関しては、3年間の定期テスト等でまとまった英文を書く問題を出題し続けてきた。大阪市平均を下回ったが、昨年度と比較すると、成果が現れたと考えている。

GTEC【今後に向けて】

聞くことについては、リスニング問題をさせるときに、リスニングをした問題の答え合わせで終始するのではなく、原稿を見ながら聞かせ、英文の理解を深める訓練をしていく。

読むことに関しては、教科書以外の投げ込み教材を利用して、英文を読む機会を増やすことに加え、多種多量の音読練習を行い、脳内で英文を自動的に音声化できるようにしていく。

話すことに関しては、話すことの活動をしたあとに、活動中に見受けられた間違いに対する指導や優れた表現を取り上げ、生徒が発話する英文の質の向上につなげていく。また、即興性に関してはQ&Aや1分間スピーチなどの活動を段階的に実施していく。

書くことに関しては、英作文の型を指導すれば、型に当てはめて書くことができる。手紙、メール、意見文など、状況に応じて型を指導し、実際に書く機会を提供していく。また、定期テストでまとまった英文を書く問題を継続的に出題し、書くことに親しませることに加え、添削などを通して、英文の質を上げられるように指導をしていく。